

藤村『新片町より』の成立と読者——初出と校異より——

永 潤 朋 枝

序、

藤村は、詩人、小説家として名高いが、詩、小説を書く一方で、明治大正、昭和を通して随筆を書き続けた。藪禎子氏は、藤村は「出色の随筆家」であり、感想集紀行文集が全著述のほぼ三分の一に近く、他作家に比べて比重が高いと指摘している⁽¹⁾。藤村の随筆研究は、日本近代文学における随筆というジャンルの意義を明らかにし、文学史を捉え直すことにもつながると考えられる。それにもかかわらず藤村の随筆研究は少ない。その原因は大きく見れば、従来の日本近代文学における小説偏重である。それだけでなく藤村については、随筆の研究基盤そのものが整っていないからである。

藤村の随筆については、その核というべき六冊の感想集所収作品の初出すら未詳のものが大半であった。各感想集は五〇〜七〇程度の比較的小編から成っている。これらは、さまざまな初出新聞雑誌に発表された文章を集めて作られたので初出調査は容易ではない。けれども、初出未詳であるために、それらが発表時、誰に向かって書かれたのかも不明

藤村『新片町より』の成立と読者

だったのである。『藤村全集』（筑摩書房 一九五六―一九七二）における感想集の「解題」に各篇の解題はない。初出の明らかな篇の初出が、全集収録順でなく初出発表順に列記されている。浦西和彦氏が、これではどの篇が初出未詳なのかかわからず、初出未詳の多いことをおおい隠す記載になっていると指摘している⁽³⁾。

日本近代文学の個人全集の「解題」には通例、作品がはじめて発表された初出の新聞雑誌における本文（自筆原稿が加わることもある）と、それを作家が改稿して刊行した単行本における本文などを比較した、校異が付けられている。作品の成立過程を知り、本文を確定し、研究を行うために不可欠だからである。『藤村全集』において、初出未詳の多い感想集には校異もない。単行本化の際の削除・脱落部分には、重要な情報が記されている可能性もあるが、それらは抹消されたままになっている。『藤村全集』の中でも不備の目立つのが感想集なのである。藤村の随筆研究の基盤を整備するためには、まず感想集の初出を明らかにして校異を作成し、作品が誰に向かって書かれ、どのように成立したのかを明らかにする必要がある。

本稿は、藤村の一冊目の感想集『新片町より』について全集収録順に、初出などに関わる事項と校異について記し、そこから初期の藤村の随筆について考察するものである。『新片町より』は、佐久良書房から「芸入門第一篇」として明治四二（一九〇九）年九月二三日に発行された。⁽⁴⁾『藤村全集』第六卷（以下「全集」と記し、全集頁をカッコ内に漢数字で記す）はこれを底本としている。ただし、単行本は総ルビ、全集はバラルビである。藤村が感想集をどのように作り始めたのかを明らかにするため、校異は詳しく記す。また必要に応じて、単行本文や単行本刊行後の再録状況を記す。

凡例

- 一、「新片町より」の篇の題をゴシック体で記し、全集の頁を付す。「解題」に初出記載のある篇には「□」を付す
- 二、初出の紙誌、発行年月日、（ ）内に巻号、原題、ルビの記載などを記す。
- 三、藤村の感想集は、一つの標題をもつ初出本文が単行本（全集）で別々の篇題を持つ複数の篇に分けられている場合がある。分けられた篇が並んでいる場合は、まとめて初出に関わる事項を記す。離れている場合は改めて記す。
- 四、藤村の感想集は、複数の初出紙誌の本文を合わせて一篇にしている場合もある。この場合は、初出本文の範囲を全集の頁行によって記す。

五、頁（漢数字）・行（アラビア数字）を記し、全集本文と、その下に初出本文を記して、「↑」によって改稿されたことを示す。「↘」は、本文中の改行箇所を示し、「↙」は同行に二箇所異同のあることを示す。必要に応じて、「↑単行本本文」を全集本文と初出本文との間に入れる。

六、初出本文と全集本文についての異同は、主要なものに限って記す。原則、仮名遣い・送り仮名・外国語の表記・句読点・ルビ・圈点・カッコ・段落一字下げ・ほぼ同義の漢字仮名表記の異同⁽⁵⁾については記さない。明らかに初出本文の誤植と考えられるものについては記さないが、全集及び単行本の誤植と考えられるものは記し、校訂本文について「」の中に記す。

七、漢字は、原則として新字体に改めた。また、初出が総ルビの場合は、適宜バラルビに改めた。

序（三頁）

単行本で書き下ろされ、目次の前に「序」として掲載。単行本は総ルビであるが、「序」のみルビなし。

浅間の麓（五頁）

明治四二年五月一九日発行の『信濃毎日新聞』一面に同題で掲載（署名は「嶋崎藤村」）。初出総ルビ。

六六 気が狂つた ↑気がフレた

七11 沈着^{おちつき}た ↑単純な

七15 似て居る。／小諸義塾 ↑似て居る。／露西亞^{ろしあ}の小説家ツルゲ

ネフはハムレットを評して、激しく動揺した精神であると言つた。現代の日本の青年に、ハムレットの如き性格を見出すことは、左程困難でもなからう。斯ういふ時代にも、一方には土屋君のやうな沈着^{おちつき}いた、物に動かされない、そして徳のある人が、浅間の麓に隠れて、商工学校の教師などをして居るかと思へば、面白い。／小諸義塾 (初出の句点は白ゴマ点)

八1、八2 茨豌豆^{さやえんどう} ↑雪割^{ゆきわれ}

吾国民性の欠点 (八頁) □

明治四〇年一月一五日発行の『新潮』(6—1)「雑録」欄に同題で掲載。初出は談話体で末尾に「(談話)」とあり、ルビなし。

八11 見よ、仏蘭西^{フランス}人の芸術に対する情熱も、独逸^{ドイツ}人の哲学も、乃至

↑御覽なさい、仏蘭西人の情熱ある『ロオマンチズム』も、
独逸の人の芸術的思想と哲学も、それから

九1 斯くして ↑斯ういふ風にして

九5 外国人の精神とか思想とかを ↑外国の文明とか精神感情とかを

ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己 (九頁) □

明治四二年五月一日発行の『秀才文壇』(9—10)に「ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己」の題で掲載。小池健男氏が「解題」の三月ではな

藤村『新片町より』の成立と読者

く五月の掲載であることを指摘した。初出総ルビ。ルソオ著・石川戯

庵訳『懺悔録 後篇』(大日本図書 大正元年)の跋として再録された。同書は原文からの初の完訳本で、上田敏と森鷗外の序がある。

九12 村山鳥逕君の細君の兄さんにあたる ↑村山鳥逕君の兄さんの

九14 それを貸して貰つて、読んだ。 ↑それを頼んで貸して貰つて、

一夏か、つて読んだ。

一一2 同じだ。 ↑同じやうな処がある。

一一13 出来る。 ↑出来るやうな気がする。

放浪者 (二二頁) □

明治四一年九月一五日発行の『文章世界』(3—12)「雑録」欄に「浅草にて筆を執りつゝ、ありし時」の題で掲載。同欄「初対面観」に掲げられた七名の訪問記にも「島崎藤村氏(天火)」がある。初出総ルビ。

一一9 お茶を出し、他所^{よそ}から貰つた菓子などを侷^すめた。 ↑お茶な

んか出し、他所^{よそ}から貰つた菓子などを侷^すめた。

一一12 女子供が ↑女子供なんか ↑／親戚の娘などは、↑

親戚の娘なんか、(以下、一四8、一四15、八二7の「なぞ」も、

初出は「なんか」)

一一14 見えた。／その人が ↑見えた。先づ私は心を動かされた。

／その人が

一一三6 若い人で ↑若い人でもつて 話し込んだ。 ↑話し

込んだやつた。

一三九 其人が自分の身上を話しに行つた ↑ 其人は自分の身上みのうへの話をして金を呉れると言つた

一三〇 思つた。私が ↑ 思つたので、私が

一三七 飾もないところ ↑ 飾もないといふところ

一四三 自分は死ぬ ↑ 自分も死ぬ

老婆と孫 (一六頁) □

以下、「老婆と孫」「静坐の努力」「モウパッサン」「煩悶者」「モデル」「放浪者」の六篇は一括して、明治四二年四月一五日発行の『文章世界』(4—5)「本欄」に「新片町より」の題で掲載。初出に各篇の題はなく、二行空きになっている。初出総ルビ。

静坐の努力 (一七頁) □

モウパッサン (一七頁) □

煩悶者 (一九頁) □

一九六 住職の声は ↑ 住職は声は

モデル (二〇頁) □

二〇三 遊もてあそばれ (↑ 遊あそばれ) ↑ 遊あそばれ (ルビ不要)

二一五 馬場君、丸山君 ↑ 孤蝶氏、晚霞氏

二一七 見る稽古 (↑ 見る稽古) ↑ 視る稽古

放浪者 (二二頁) □

二二一三 いつぞやある若い放浪者の来たことを言つたが、↑ いつぞ

や、『浅草にて筆を執りつゝ、ありし時』といふ題で、ある若い放浪者の話をしたことがあつた。

二二一三 グシヤ〜に ↑ クシヤ〜に

二二一八 伝記とか、日記とかに ↑ 伝記とか、自伝とか、日記とかに

二二二四 礼を ↑ 丁寧に礼を

『博多小女郎浪枕』を舞台の上に見て (二三頁) □

明治三九年一〇月一日発行の『早稲田文学』(10号)「本欄」に「博多小女郎浪枕を舞台の上に見て」の題で掲載。同号「彙報」欄は、「小説壇の新気運」として、藤村『破戒』、国木田独步『運命』、夏目漱石『虚集』を挙げ、「文壇の視聴を動かした」『破戒』を一三頁近く取り上げている。本文に「今話した通りだ」(二七16)、「こゝまで話して来て」(二九11)とあり、初出は談話体、ルビなし。

二二五一 本郷の唐澤君、銀座の細川君、巢鴨の武林君、上村君、小山内君、それから大久保の戸川君、村山君 ↑ 本郷の唐澤さん

(以下「村山さん」まで、初出は「君」ではなく「さん」)

二二五三 暇はなかつた。それに蒸熱い ↑ 暇はありませんでした。おまけに蒸熱い

二二六四 面白半分に ↑ 洒落に

二二六五 苦痛に乏しかつた。↑ 元禄風に見えて気になりました。

二二六七 出没する者で ↑ 出没するので

二二九一三 この話 ↑ 私の話

二九七 彼は ↑あの人は

三〇四 今の世に元禄と言へば、風俗 ↑今は元禄風流行の世で、よく風俗

印象主義と作物(三〇頁) □

明治四二年三月一五日発行の『文章世界』(4―4)「本欄」に同題で掲載。「印象主義の研究」の総題で、永井荷風「仏国に於ける印象派」など三篇と共に掲載された。初出段落一字目の「○」は単行本で削除され、段落間が一行空けられた。初出総ルビ。

三一六 それは ↑それを

三一二 私は感心した。 ↑自分は感じた。

三二七 印象の単純と清新とは同時に心理の深い解剖でもあるやうな作はなからうか。 ↑印象の単純と清新とに兼ねるに、心理的の深刻を以てした作はなからうか。

三二二 話し合ったことだ。 ↑話して笑ったことだ。

三二四 印象派風に描き表はさうとした絵画 ↑印象派風の絵画

写生(三三頁) □

明治四〇年三月一五日発行の『文章世界』(2―3)「談叢」欄に「写生雑感」の題で掲載。「写生と写生文」の総題で、高浜虚子「写生文の由来とその意義」、三宅克己「余の踏める写生の段階」など八篇と共に掲載された。初出段落冒頭一字下げの次の「▲」は単行本で削除され、

段落間が一行空けられた。初出は談話体、総ルビ。

三三三 岩村氏 ↑岩村さん

三三八 視るといふことは ↑視るなんてことは

三三三 一時私は写生帳を作つて、日記風につけて見た。 ↑自分の写生帳は日記風につけることにして居りましたが、

三四三 私が信州に居る頃は、よく雲の日記なぞをつけて見たが、斯うして ↑元来自分は愚鈍な人間で、へまなことがかり多い為にもいつも冷汗を流したり自分を責めたりして居るのですが、

書齋と光線(三五頁) □

明治三九年一二月一五日発行の『文章世界』(1―9)「談叢」欄に同題で掲載。「作家と著作」の総題で、夏目漱石「余の『草枕』」、徳田秋声「真の社会小説」など六篇と共に掲載された。初出は談話体、総ルビ。

三五六 光線などは奈何でも可い、と一概に言ふ人があるかも知れんが、↑光線なんざあ奈何でも可いなんて、笑ふ人があるかも知れませんが、

三六一 倦み易い。 ↑倦み易くは有りますまいか。

三六九、三六五 日本風の家屋 ↑家屋

三六二 屋外(↑屋外) ↑屋外(ルビ不要)

三六九 巖窟のやうな西洋造は ↑西洋造は廂の浅いかはりに、

三八九 例の寒国 ↑御承知の寒国

北村透谷君 (三九頁) □

明治三十九年九月一日発行の『新古文林』(2―11)に「明治文士の悲惨なる最後の状況」の総題で、斎藤緑雨・原抱一庵・平尾不孤・北村透谷が取り上げられ、二人ずつの談話が掲載された。「(四)北村透谷君」は、「島崎藤村述」の後に「○」で区切られて、「戸川残花談」が続いている。初出は談話体、総ルビ。

三九五 早いものだ。北村君が亡くなってから最早十五年目に成る。

↑早いものですなあ。北村君が亡くなってから最早十二年目に成りますよ。

三九二 あの煙草屋へは ↑私なぞは

四〇三 母御から享け継いだものらしい。父御は ↑母親さんから享け継いだものらしいのです。父親さんですか、父親さんは

四〇四 人だと記憶して居る。久保田米僊氏の門に学んだ画家の丸山古香君、あの人は透谷君の弟だが其弟の方が丸山の名跡を襲ふことになり、兄さんの透谷君は北村を継いだのだといふことだつた。言はゞ本家分家の形だ。私もよくは知らんが、な

んでも丸山は北村の叔父さんの家だとか言つた。 ↑父親さんだと記憶して居ます。当時御院殿ごいんてんに住んで居られる画家の丸山古香君まるやまここう、あの人は透谷君の弟ですが其弟の方が実家を継ぐことになり、兄さんの透谷君は別に北村の名跡を襲つたのだといふことでした。言はゞ分家のかたちですな。私もよく

は知りませんが、なんでも北村は叔父さんの家だとか言ひましたよ。

四〇八 お美那さん ↑お皆さん

四〇九 婦人 ↑才女

四一〇 頭れて居る。 ↑頭れて居ると思ひます。

四一一 三年ばかり ↑僅か二年間

青年の書 (四二頁)

以下、「青年の書」「単純なる心」「ミレエの言葉」「運命」の著者」「新生」「精神の自由と肉体の自由」「教育の分業法」「健全、不健全」「一日」「憐むべきもの」「凌霄葉蘭」「今」「日記」「面白く思ふこと」「外面と内面」「無智の悲哀」「言葉」「自信ある人」「専門家」「涙と汗」の二〇篇は一括して、明治四二年六月一〇日発行の『中学世界』(12―7)に「新片町より」の題で掲載。初出に各篇の題名はなく、「○」で区切られている。初出には、後出の「愛」(六七頁)の元となった一区切りの文章があり、下記「四四六」「五〇五」に記載した初出の「○」で区切られた文章は単行本で削除された。初出総ルビ。

単純なる心 (四二頁)

四二八 持ちたい。そして複雑 ↑持ちたい。「生の単純」を得たい。

斯くして複雑

四二九 単純なる心 ↑単純な心

四三二 今の時にあたつて、単純なる心を持つのは実に難い。 ↑今

の時は、吾儕の生涯を愈よ複雑に導きつゝある。

ミレエの言葉 (四三頁)

『運命』の著者 (四三頁)

新生 (四四頁)

四四六 惨澹たるものである。↑惨澹たるものである。／○／新し

きもの必ずしも誇れない。旧い時代の人はダメだと言つてケ

ナしても、新しき時代の人は必ず頼み甲斐あると言へるであ

らうか。

精神の自由と肉体の自由 (四四頁)

教育の分業法 (四五頁)

健全、不健全 (四五頁)

一日 (四六頁)

憐むべきもの (四六頁)

四六五 知らなかつた。↑知らなかつた。／○／(六七頁「愛」の

元となつた文章)

凌霄葉蘭 (四七頁)

四七二 凌霄葉蘭 ↑「ノウゼンハラン」とやら

四七四 凌霄葉蘭 ↑「ノウゼンハラン」

今 (四七頁)

四七八 暴進的 ↑急進的

四七八 である——政治に、教育に、文学に、家庭に。↑である。

日記 (四八頁)

面白く思ふこと (四八頁)

外面と内面 (四九頁)

四九二 人の行為は臆て内部的生命の光景である。イブセン ↑外面

の描写は臆て内面の描写である。イブセン

無智の悲哀 (四九頁)

言葉 (五〇頁)

自信ある人 (五〇頁)

五〇五 だと思ふ。↑だと思ふ。／○／書かなければならない手紙

はどういふものか書く氣に成れない。書かなくてもいい、やう

な手紙はそのくせズン／＼書ける。

専門家 (五一頁)

涙と汗 (五一頁)

イブセンの足跡 (五二頁) □

明治四二年一月一日発行の『新天地』(2—1)「論叢」欄に同題で掲

載。「イブセン研究」の総題で、柳田国男「イブセン雑感」、戸川秋骨「近

代的思想」など七篇と共に掲載された。初出パラルビ。

五二10 批評家もあるやうだが、↑批評家もあるさうだが、

トルストイ (五三頁) □

以下、「トルストイ」・「批評」・「仏蘭西にある友人の消息」の前半・「チ

エホフ」の順に四篇一括して、明治四一年二月一日『早稲田文学』

(37号)「論説」欄に「浅草より」の題で掲載。初出に各篇の題名はなく、「○」で区切られている。初出ルビなし。

五三九 窺へないかと思ふ。 ↑窺へないやと思ふ。

五三〇 引である。それに拠ると、(↑引^ひである。それに拠ると、)

↑引いてある。その語に、「引いてある」

五三二 乏しいとしてある ↑乏しいと評してある

五四四 観がある。 ↑観がある自分は、彼が晩年に書いたものばかりを読んで、彼の全体を知ることが出来ないと思つて居る。

批評(五四頁) □

五四二 批評家の態度も変らねばならぬ。 ↑批評家の態度も以前とは変りつゝある。

チエホフ(五五頁) □

五五九 後から自分のことを『馬鹿!』 ↑後から『馬鹿!』

仏蘭西にある友人の消息(五六頁) □

明治四二年二月一日『早稲田文学』(37号)「論説」欄に「浅草より」

の題で、前出の「批評」と「チエホフ」との間に、五六頁二行目から五七頁一行目までが掲載された。初出ルビなし。五七頁二行目「是有鳥君」以降最後までは、明治四二年一月三十一日『読売新聞』日曜附録に、「仏蘭西だより M.A.」として、藤村の前文を付して掲載された。「M.A.」は、有鳥壬生馬(生馬)のことである。初出総ルビ。全集「解題」では前者のみが初出と記載されている。

五六二 有鳥君 ↑有鳥壬生馬君

五七三 出来た、自分は(↑出来た、自分は) ↑出来た。自分は

〔出来た。〕

五七七 画家 ↑blave

五七二 是有鳥君から来た今年の消息である。君は巴里 ↑是は仏

蘭西に在る友人から来た最近の消息である。M.A.氏は巴里

五七三 正月としてある。/『マントン』 ↑正月としてある。書中、

私信に関する部分だけ省いて、貴紙の附録へ寄せることにした—鳥崎生附記。/『マントン』

五八二 二日 ↑一日

五八八 昂る ↑昇^{のぼ}る

五八〇 橄欖樹(↑橄欖樹) ↑橄欖樹

五九五 El Greco (↑pel Greco) ↑pel Greco

六〇四 生活の ↑生活^{せいかつ}に

六一四 veux (↑venes) ↑venes

批評(六二頁) □

明治四二年(一九〇九)三月一日発行の『新潮』(10—3)に「批評について」の題で掲載。末尾に「談」とあり、もとは談話。初出で「○」で区切られていた箇所が、単行本では一行空けられた。初出ルビなし。

六二二 去年十二月の早稲田文学に話を出した。其の中に批評 ↑批評に就いて平素思つて居ることを述べよう。それを以て答に

かへることにしよう。／私が去年の早稲田文学十二月号に、

初出未詳。

「浅草より」と云ふ漫筆を書いた。其の中にも批評

六二二 『ラスキンが ↑「批評と云ふことを考へる度に、自分はラ

スキンを思ひ出す。ラスキンが

牧師の言葉（六七頁）

初出未詳。

六二四 徳田秋江君 ↑徳田秋江さん

六二五 島村抱月君 ↑島村抱月氏

愛（六七頁）

六二七 立派なる事業には相違ないが、一を人生の批評、一を芸術の

批評といふ風には分けて ↑立派な批評家の事業には相違ないが、私は一を人生の批評、一を芸術の批評といふ風に分けて

て

六二九 鑑賞 ↑鑑賞家 / ではないと思ふ。 ↑ではない。

六三八 明治の学者や詩人が二十代か三十代で ↑明治の大学者が

二十代や三十代で

六六七（全集本文） ↑愛——といふ言葉は、よく繰り返される言葉

六三二 人物だとか、或は周囲の空気だとか、 ↑性格だとか、或は

思想の衝突だとか、

六四六 正しき判断 ↑正しい判断

六四八 幾度かそれが（↑幾度かそれが） ↑幾たびそれが

も人を許さないやうな愛は、畢竟空想の愛ではあるまいか。

額の汗（六四頁）

女子と修養（六八頁）

初出未詳。

明治四〇年七月一日発行の『女子文壇』（3—9）「女子文壇」欄に同題で「島崎藤村述」として掲載。初出は談話体、総ルビ。

養鶏者の友へ（六五頁）

六八二〇 あらうから、さう始終 ↑ありましやうから、幾ら男でも、

さう始終

六九三 発見する。多くの女学生は斯うである。 ↑発見するものが、随分多いだらうと考へます。

六九七 舅姑に使へる (↑舅姑に使へる) ↑舅姑に侍へる (舅姑)

六九八 自然と ↑自然に

六九〇 果敢ないもので、↑単純なものになりました、

六九一 慾を満すより外には、↑間食の外には、

六九四 嘆息に埋もれてゐる (↑嘆息に堆もれてゐる) ↑嘆息に堆もれてゐる

七〇六 苦しい時 ↑貧乏した時

七一四 夫と逆境を共にする場合には、↑夫の逆境或は苦境の生活に闘ふには、

七一三 岐れる肝腎なところかと思ふので、↑岐れる、肝腎なところかと思ふのです。

七一八 心掛けて欲しい。 ↑心掛けねばなりません。

七二九 気魄を失はないやうにしたい。たま〜心の寂しい時には、薄化粧でもして、サツパリとした着物に着更へて、独りで横に成つて見るなぞも、面白い事だが、↑気魄を失はないやうにしたい。退屈した時に、煎餅でも食べやうといふのは、もとより結構ですが、同じ娯楽の中にも判断とか、批評とか、趣味とかを含むやうに、

七二九 開化の程度 ↑生活の程度

七二一三 苦いうち (↑苦いうち) ↑苦いうち (苦いうち)

新聞紙の傾向 (七三頁)

明治四二年四月二七日発行の『東京毎日新聞』一面「毎日文壇」欄に同題で掲載。全集別巻「作品年表」に「明治四二年四月五・六日 毎日新聞 新聞紙の傾向* 六」とあるが、六巻「拾遺」に収録されておらず、『東京毎日新聞』『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』当該日にも掲載されていない。「日糖事件」は、大企業日糖と衆議院議員らとの間の贈収賄事件である。初出総ルビ。

七三〇 『是、社会なり』 ↑之が社会である

七三二 『社会』 ↑社会 (七三三の『群衆』も初出はカッコなし)

七四二 個人々々に ↑個人々々が互に

七四三 新聞紙 ↑今日の新聞紙

歓楽の時、活動の時 (七四頁) □

明治四二年八月一〇日発行の『中学世界』(12—10)に同題で掲載。「都会の夏と田舎の夏」の総題で、泉鏡花「夏の夕」など六篇と共に掲載された。全集「解題」に初出とある「江戸趣味と田舎趣味」(『学生タイムス』明40・2)は、もとになつたものではあるが、題も本文もかなり異なる。また、『中学世界』掲載本文の一行分が単行本から脱落している(七六九)ので、こちらを初出として異同を記す。初出総ルビ。

- 七五五 浴衣を着て、↑浴衣などを着て、
 七五〇 映り難い ↑映り悪い
 七五二 聞きわけ難い ↑聞きわけ悪い
 七六二 江戸人の精神 ↑威大な江戸の精神
 七六九 その反対に単独の発達を遂げるには、↑その反対に単独の
 発達を遂げた地方を指しているのである。単独の発達を遂げ
 るには、「初出本文」

山国の新平民（七七頁）□

明治三十九年六月一五日発行の『文庫』（31―6）に『破戒』の著者が
 見たる山国の新平民」の題で「島崎藤村氏談」として掲載され、末尾に
 「（一記者筆記）」とある。初出冒頭には、以下の「七七13」に記した導
 入部分、「私の心を動かした人物」という章題の前に置かれていたが、
 単行本では一文にまとめられた。全集の七八〜八三頁の一行空きの箇所
 に、初出では「新平民迫害の事実」「弥右衛門さんの話」「穢多町の訪問」
 「ハイカラな新平民」「新平民の二階級」「山国と新平民」「破戒」と私
 の興味」の章題がある。初出は談話体、パラルビ。

- 七七13 信州の新平民のことで、私が見たり聞いたりした事実を、す
 こし話さう。／長野の師範校に教鞭を執つた人で、何んでも
 伊那の ↑そいつは困りましたなあ、別に今度の本（『破戒』）
 に就いて御話するやうなことは有りませんよ。では信州の新
 平民のことで、私が見たり聞いたりした事実でも少許申上げ

藤村『新片町より』の成立と読者

- て、それで御免を蒙りませう——先づ長野の師範学校に先生
 をして居たといふ人の話から始めませうか。／私の心を動か
 した人物／其人は伊那の
 七七14 何かを担当して居た一人の講師があつた。 ↑何かの担当だ
 つたんださうです。
 七八1 小学教師をして居る人があつたが、氏は其人に会つたことが
 あるとの話だつた。 ↑小学校の先生がありましたかね、伊
 東さんは其人に会つたことがあつたんださうです。
 七八3 聞いて見たが、孰れも賞讃して居た。 ↑聞いて見ましても
 皆褒めるんですね。
 七八4 行つた。が、何処にも ↑行きました。何処にも
 七八5 奉職して居られた伊東長七君、彼の人私が私 ↑奉職して居る
 伊東長七さん、彼の人我先達私
 七八7 伊東君 ↑伊東さん（以下、八〇4、八一13・17「君」も初
 出は「さん」）
 七八7 冤罪で入獄した知己が ↑無実の罪で獄に入つて居る知己が
 七八8 地方人が（↑地方人が） ↑地方の人が「地方の人」か
 七八14 貴様の言ふやうなことはあるまい。 ↑彼様こととはあるまい、
 七八16 住んで見て解つた。 ↑住んで見て驚きました。
 七八17、八三9、八三16 『破戒』 ↑あの本
 七八18 書いて見たのである。 ↑書きましたので、実際あつた事実
 なんです。

- 七九一 有り勝に思へる。 ↑有り勝の事実なんです。
- 七九二 理学士鮫島晋氏、彼の人は越後の出生で、 ↑理学士の鮫島晋さん、彼の人は越後の人で
- 七九三 書いて見た。それで思ひ出すが、現に ↑書いて見ましたので、架空の話でなく実際ありましたことなんです。現に
- 七九四 千曲川に近い処 ↑町外れ
- 七九五 御免を蒙る ↑御免だ
- 七九六 氏と ↑栄助さんと / / 此の小山と云ふ人 ↑此栄助さんと云ふ人
- 七九七 青年中でも ↑青年わかひひとの中でも
- 七九八 武士の零落した ↑武士さむらひの落ちぶれた
- 七九九 富んだ人 ↑富んだ柳田さん
- 八〇〇 兎に角、 ↑私はそれは知りませんが
- 八〇一 私もそれから ↑私も其何ンです、
- 八〇二 斯く ↑斯ういふ
- 八〇三 先年まで丸山君は ↑昨年まで丸山さんは / / お頼みして ↑御願ひ申して
- 八〇四 仏壇拝見とやつた。 ↑仏壇拝見と出掛けたんです。この家うちは何でした。
- 八〇五 一体が客を ↑客を
- 八〇六 但し此家では、 ↑其こゝ処では、
- 八〇七 聞きながら思つて見た。 ↑聞き乍ら考へましたね。大変御馳走になつて帰つて来ました。
- 八〇八 高く秀で、居て、 ↑高く出ッ張つて居て
- 八〇九 といふことで、小諸の人達は ↑といふですね。小諸の人なにかは
- 八一〇 皮革類をいぢる ↑皮なんかいぢる / / 馬—— ↑馬なんです、
- 八一一 居るのだから、自然さういふことを言はれるのだと思ふ。
- 八一二 ↑居るですから、そんな風に獣皮に関係したり、身のまはりを不潔にしたりして居ると云ふ所から、そんなことを言はれるんだらうと思ふですね。
- 八一三 小山氏 ↑栄助さん
- 八一四 神津猛氏、彼の人の細君はお蝶さんと言って、その人の叔母に当る塩川鉄砲店のお辨さんといふ人が『破戒』を読んでからは、もう穢多のことは悪く言ふまいとさう言はれたとかで、先頃神津氏が来て私に話したことがある。 ↑神津猛さん、彼の人の細君は蝶さんと言ひますが、そのお蝶さんの叔母にあたる塩川鉄砲店のお辨さんが彼本を読んでもう穢多のことは悪く言ふまいと言つたとかいふことを、先頃神津さんが来て私に話しました。
- 八一五 生きて居つたり死んで了つたりした教育のある新平民も沢山にある。 ↑生きてたり死んだりした教育のある新平民もあつたのです。

八三七 八年 ↑七年 / 山国の新平民の状態 ↑山国の有様

発売禁止(八四頁) □

明治四二年七月一日発行の『中央公論』(24―7)「附録」に、総題「姉の妹」の発売禁止に対する諸名家の意見」として、前号掲載の小栗風葉「姉の妹」発禁に対する「文壇諸名家の公平なる批判を仰ぎ」たいという六月一〇日付の反省社の書面と共に掲載された。藤村を筆頭に、他に内田魯庵や永井荷風ら三〇名が回答している。初出ルビなし。

八四三 『姉の妹』が ↑拝復 / 『姉の妹』が

八四三 発表した『中央公論』の企て ↑発表しやうといふ貴紙の企て

八四五 曩日の時評 ↑六月の時評

八四六 心労を ↑心労と、文学上の作物に対する粗雑な見解とを

八四八 政治家 ↑政事家

八五一 秩序に重きを置く 秩序を重んずる

八五六 述べる。 ↑述べる。六月十一日。

小村とウィツテ(八五頁)

明治四二年八月一日発行の『趣味』(4―8)「雑俎」欄に「東西の相異」の題で掲載(全集六卷「拾遺」(五二七頁)に「東西の相異」として収録されている)。「活動写真」の総題で、小川未明「飽かざる追求」など七篇と共に掲載された。同号は藤村の小説「河岸の家」も掲載している。日露戦争講和条約の首席全権小村寿太郎とウィツテを活動写真で見比べ

たというものである。初出総ルビ。

明治学院の学窓(八六頁) □

明治四二年八月一五日発行の『文章世界』(4―11)「本欄」に同題で掲載。「予の二十歳前後」の総題で、小山内薫「高等学校時代」など四篇と共に掲載された。初出総ルビ。

八六一 学院のあるところ ↑学院のあつたところ

八七一 といふやうなことであつた。 ↑といふやうなことを言つて居た。

八七二 自然と政治家に ↑自然と私も政治家に

八七三 そんな事情で私は針製造人の候補者として、自分は又少しも知らずに、明治学院へ送られたのであつた。 ↑それだから

して、私は針製造人にされるといふことは少しも知らずに、明治学院へ入つたのであつた。

八七五 江口定條先生に、もと私が就いて語学を ↑江口定條先生といふ人が、もと私の語学を

八七七 といふことで、それからあの学校へ入ることに定めたのであつた。 ↑といふことだつたので、それからその学校へ入つたのであつた。

八七五 思想とが、↑思想が / 時代もあつた。 ↑時代であつた。

八八四 その当時は、↑その外には、 / 物語類が、翻刻されて世の中に出るといふ時世であつた。 ↑物語類で、翻刻され

て世の中に出るといふ本は、大抵読んだ。

八八〇 入る初め ↑入つた初め

八八一 自分にとつて処女作ともいふべきものを公にしたのは、

↑本当に自分で文学的生涯が始まつたと思ふのは、

八八二 気がする。 ↑気がされる。

八八三 したものだ。 ↑したものであつた。

長谷川二葉亭氏を悼む（八八頁）□

初出未詳。「解題」に『東京朝日新聞』（明治四二年五月二八日）初出

とあるが、見つけられなかった。金曜附録などが散逸しているのかもしれない。本文中に「今夜は氏の遺骨が神戸へ着く筈だ」とあるが、二葉亭四迷の遺骨は二九日早朝に神戸港着、夕方に新橋に向けて出発した。

モウパッサンの小説論（九二頁）□

明治四二年八月一九二〇・二二・二四日の『二六新聞』『二六文壇』の頁の「時代文芸」欄に「モウパッサンの小説論（上・中・下の上・下の中・下の下）」の題で掲載。各日掲載分の間が単行本で一行空けられた。初出総ルビ。

九一七 序、『父と』 ↑序に『父と』

九一九 作物と併せ ↑作物も併せあは

九二一 鍵である。モウパッサン ↑鍵である。／モウパッサン

九二一 訳文に拠て、 ↑訳文を引いて、

九一四 批評家又は作家 ↑批評家及び作家

九二八 ものではないかも ↑ものでないかも

九三六 僅少であつたらうか。 ↑僅少なのであらうか。

九七五 行為を心理と見て書く ↑行為によつて心理を書く

声（一〇〇頁）

初出未詳。『新片町より』刊行の数ヶ月後には、松原至文編『小品文範』（新潮社 明42・12・14）に収録されている。

浅草にて（二〇二頁）□

明治四二年八月一日発行の『文章世界』（4—10）「附録——日記」欄に同題で、正宗白鳥、田山花袋ら一〇人と共に掲載。白鳥「一週間の日記」に「文章世界の依頼により特に五六日書いて見ることにした」とある。一〇二九について、『帝国文学』（明42・7・1）に「土産、『新潮』（同7・1）に「雑貨店」が載つた。「弟子」は『早稲田文学』（同6・1）掲載なので、六月二三日脱稿はあり得ない。『雑貨店』及び『土産』になるところが、単行本から「弟子」と誤記された。初出総ルビ。

一〇一七 といふ話 ↑といふ一文

一〇一八 大さ（↑大さおほき） ↑大さ（大さおほき）

一〇二九 『雑貨店』及び『弟子』の稿を終つた。 ↑『帝国文学』及び『新潮』へ約束の草稿を終つた。

一〇三二 婆さんに笑はれた ↑婆さんに言はれた

- 一〇五七 声は ↑声も
- 一〇五五 なからうか、 ↑ないか、
- 一〇五五 田中等へ行く。 ↑田中、小川等へ行く。
- 一〇五八 時のもある。小山内君の時は、 ↑時のもある。小山内君と一緒の時のもある。小山内君の時は、
- 一〇七七 従順で ↑従順に
- 一〇七七 死んで居る ↑死んで居た
- 一〇八六 ある驚くべき婦人の噂 ↑ある放縦な婦人の噂
- 一〇九三 言出した。居留地 ↑言出して、居留地
- 一一〇七 外になかった。寝転んで、七月 ↑外になかった。七月の
- 一一〇九 感想を起させる…… (↑感想を起させる……) ↑感想を起させる。 [ルビ不要]

結び、

『新片町より』全56篇(「序」を除く)のうち、全集に初出記載のあるのは27篇であるが、1篇はすでに訂正されていた。⁽⁸⁾ 今回、1篇(八八)は記載紙に見あたらず、2篇(五六、七四)は訂正すべきことが判明した。本稿で初出を確認したのは51篇、初出未詳が5篇残った。今後も探索を続けたい。

判明した初出紙誌は、『中学世界』(22篇)、『文章世界』(12篇)、『早稲田文学』(4篇半)、『新潮』(2篇)の他、『秀才文壇』『新古文林』『新

藤村『新片町より』の成立と読者

天地』『女子文壇』『文庫』『中央公論』『趣味』、そして『信濃毎日新聞』、『東京毎日新聞』『毎日文壇』欄、『二六新聞』『二六文壇』、『読売新聞』『日曜附録』である。掲載誌は主に若い文学愛好家向けの雑誌といえ、特に『文章世界』『秀才文壇』『女子文壇』『文庫』は投書雑誌でもある。『新片町より』の末尾には、次のような佐久良書房同人「『文芸入門』第一篇の後に」が付いている(六〇一)。「近頃の新聞雑誌」が「文芸欄を設けて諸家の文話感想などを掲げ出した」のを見て、「一人一家の話説」を出版したいと希望していた。折しも藤村に、「文学に興味を有つ人々」から読者の手引きとなる書を探ねられることが往々あるので、そういう人々や将来文芸にたずさわる人々の参考になる冊子を出版してはとすすめられ、田山花袋などの賛同を得て「文芸入門」を出版する。『新片町より』の初出発表紙誌は、新聞文芸欄での掲載を含め、この出版の経緯と見合ったものである。

『新片町より』「序」にも、文学の「多くの読者が青年男女である」と書かれているが、判明した初出からはさらに、これらの文学愛好家が考えられるよりも若い人々であったことがわかる。初出誌の『中学世界』は、五年制の中学校生徒を読者対象とする雑誌である。⁽¹⁰⁾ 「庭に咲いた三色菫を手紙に封じ入れて寄す」、数え年「十七歳の青年」(一〇六)は、いわば読者の一つの代表として描出されていたのである。『中学世界』を初出とするものは、「青年の書」(四二)など、ごく短い二〇篇を含む。後の感想集にも出てくる格言集のようなこの形式は、中学生に向けて書き始められた形式だったのである。『中学世界』を初出とする篇が感想集

に収録されるのは、「遠野物語」(明43・7。次の『後の新片町より』所収)が最後である。感想集の読者の年齢層が変化していったのであろう。

内容から見れば収録されてもよさそうであるのに、『新片町より』に収録されなかった随筆もある。たとえば「現時の小説に就いて」は、局部ではなく広大な同情をもって物事を根本から観ることを説き、有力誌『太陽』に掲載された(明40・8)。また、「小説の題のつけ方」は収録篇の多い『文章世界』に掲載された(明40・11)。これらが収録されなかった理由は、『新片町より』が、年若い読者に向けて編まれたからでもあっただろう。

藤村は『中学世界』に「私は青年諸君に——殊に文学に志す青年諸君に忠実な日記をつけることを勧める」(四八)と書いた。『新片町より』は、「浅間の麓」からはじまり、『文章世界』「附録——日記」欄掲載の「日記」を掲げた「浅草より」で終わる。この「日記」には、信州の新聞に「浅間の麓」を発表してから小諸の人達が訪ねてきたことや、友人と『姉と妹』発売禁止の話をしたことなど、『新片町より』全体に関わる日々の動静が綴られている。最終篇「浅草より」は、全篇を振り返って首尾を整えると共に、青年達に勧める「日記」が随想の源となることを示す実践例ともなっているのである。

51篇中8篇は、もともと談話であった。単行本で削除された「山国の新平民」(七七) 初出導入部分からは、この篇が談話を求められたことによつて成立したことがわかる。「談叢」欄の存在を見れば、当時、談話を重んじる傾向があったこともうかがえる。

初出紙誌に欄名があるものにはそれぞれ欄名を記した。初出は、「本欄」・「雑録」・「談叢」・「論叢」(五二)・「論説」欄に掲載されている。談話は、「談叢」欄だけでなく、「本欄」や「雑録」欄にも掲載された。『早稲田文学』「論説」欄(「本欄」の改名)に掲載された「浅草より」(五三)について、藤村は「漫筆を書いた」(六二二の初出)と書いている。欄名が、必ずしも執筆者の意識と合わないということも見えてくる。

校異作成から明らかになった校訂本文については、脱落行(七六19)など、各箇所(一)で記した。全集のルビには、初出とも単行本とも異なる、疑問のあるものがあり、ルビについてもこれらは記した(二〇3、三六12、六九7、一一〇9、等)。

単行本本文は、基本的には初出本文からよりわかりやすい文に改稿されている。「やうな」(一一二)、「と思ひます」(四〇18)などが削除されて断定の形にされている。中には、「外面と内面」(四九二)のように、初出の「外面の描写は臆^{やが}て内面の描写である」を見てはじめて篇題の意味がわかるものもある。感想集では、人名に付された「君」が目立つが、初出では「徳田秋江さん」「島村抱月氏」(六二四、五)、「高山樗牛君」(六三17)などと使い分けされていたものが、「君」に統一されたこともわかる。

『新片町より』を刊行した時、藤村は『破戒』(明39・3)で「小説壇の新気運」を起こし(前出の全集二三頁初出「彙報」欄)、『春』を刊行(明41・10)した翌年の満三七歳であった。その藤村が、主に一〇代後半といえそうな若い読者に向けてまとめたものが、一冊目の感想集だっ

たのである。そして、作家と読者が共に若いという『新片町より』の特徴は、明治末文学の一面を如実に表しているのである。

注

- (1) 藪楨子「解説」(『作家の随想 4 島崎藤村』日本図書センター 一九九六)。藪氏は、「感想集」とはつきり表題に据えているのは、『飯倉だより』『市井にありて』『桃の雫』の三冊だが、『新片町より』『後の新片町より』『春を待ちつゝ』の三冊も、表記されていないだけで、実質は同じである」と書いている。この通説通り、本稿でも、これらを六冊の感想集とする。感想集は、現在の言葉では随筆集といえよう。
- (2) 『戦争と巴里』など紀行文集の初出掲載は、数種の新聞雑誌に限定される。
- (3) 浦西和彦「『藤村全集』逸文紹介」(『島崎藤村研究』一九九一・九)。
- (4) 縦156mm×横110mmで文庫本の大きさに近く、厚さ30mm。第二篇は田山花袋『インク壺』(明42・11)。
- (5) 夫れ↑其れ(一八14)、その上↑其上(五六7)、想ひ到つた↑思ひ至つた(七〇9)など。なお、単行本の総ルビはすべてが藤村自身によるものとは考えられない。
- (6) 小池健男「『ルウソオの『懺悔』中に見出したる自己』」(『島崎藤村研究』一九八六・三)

藤村『新片町より』の成立と読者

- (7) 拙稿「『藤村全集』の訂正と書誌的問題点」(『神女大國文』二〇一三・三)
- (8) (6)に同じ。

- (9) 拙稿「『藤村全集』感想集、童話集の初出」(『島崎藤村研究』二〇二二・九)で初出を明らかにしたものを含む。

- (10) 『中学世界』読者の中の文学愛好家は、卒業後ひき続いて同じ博文館刊『文章世界』の読者になったと考えられる。

付記

藤村の作品中には、今日の人権意識から見ても不適切な表現があるが、歴史的事実を正確に知るために、原文のまま記した。なお校異の作成については、京都女子大学非常勤講師・浅井航洋氏の協力を得た。本稿はJSPS科研費JP25370249の助成を受けたものである。

キーワード・藤村、感想集、初出、校異、読者、随筆